

周作クラブ会報

(第59号)
2015年6月11日発行

周作クラブ

◆主な記事◆

- 「原点の旅」(2・3頁)
- 長崎文学館便り(4・5頁)
- 原稿再録・会員寄稿(6・7頁)
- 「サロ・ド・遠藤周作の世界」
に参加して(8頁)
- 会員寄稿(9頁)
- 長崎便り(10・11頁)

文学セミナー——於・日本ペンクラブ(4月18日)

遠藤周作の神戸時代

5月17日からの「遠藤文学原点の旅」の勉強会が日本ペンクラブ会議室にて行われた。出席者は20名。講師は加藤宗哉氏、高橋千劔破氏、宮辺尚氏、周作クラブの三幹事である。



三幹事

まず加藤氏から「神戸時代の遠藤周作」について年譜にそって説明があった。

遠藤周作が1933年母と兄と共に大連から帰国したのは10歳のときである。そこで遠藤は初めて母に連れられ教会に通うことになる。遠藤の母・郁の父親は医者であった。父はコレラ患者の治療にあたっていたが、自らもこの病に倒れた。その精神を受け継ぐ郁は西洋音楽を学ぶ音楽家であった。西洋音楽は天に通じるものがあり、教会で歌われる歌は祈りそのものであった。その母の影響が遠藤を教会に導いたことはいうまでもない。夙川教会での受洗は、あくまで母に命じられたから受けたものであり、少年遠藤にはそのことの本当の意味はわかっていなかった。小学校から19歳までの神戸生活。読書に明け暮れた灘中時代のこと、その間、語られなかった1年間の上智

大学在学についてのことなど、話は続いた。

また夙川教会での受洗年月日等、色々な年譜によって違いがあるが、堅信年齢との混同があるのかもしれないとの指摘があった時に、すかさず高橋氏から、歴史小説など遠藤先生の登場人物の名前が、たとえば「佐吉」が「佐助」になったりと、毎回間違いが



セミナー出席者

あり「チェックが大変なんだよね」との言葉に、加藤、宮辺両氏も大きく頷かれ、会場には笑いがあふれた。

また宮辺氏からは『サウロ』についての貴重な話があった。遠藤が『サウロ』を書いたのは25歳の時のことである。小林聖心女子学院で俳人の稲畑汀子さんが講演された際、生徒たちのた

めに遠藤が書いた戯曲『サウロ』について触れ、この原稿の存在が判明した。宮辺氏は当時編集者としてこの生原稿を写真に収め『新潮』(2000年6月号)に掲載した。

遠藤周作にとって神戸時代はまさしく母との思い出が詰まった時である。神戸を舞台にした小説『黄色い人』はもろんのこと『母なるもの』や、『夙川教会』『仁川村のこと』をはじめ多数のエッセイ、そして「私の愛した小説」にも夙川教会の告解室のことが印象的に述べられている。

幼年時代にカトリックに受洗した遠藤は、あたかも合わない「洋服」を「和服」に仕立て直すことをかせられたかのように言う。その服は紛れもなく愛する母からもらったものであり、遠藤はその洋服を甲羅にたとえ、甲羅が皮膚になるように小説を書いてきたと述べた。そして夕暮れの仁川で聞いた法華寺の鐘の音と聖心女子学院の夕の祈り鐘を聞きながら「二つの異なった宗教、東洋の鐘と西欧の鐘のひびきの違いを、何か不思議なもののように思いながら聞いたものだった」と記した。今回はその仁川、夙川教会など遠藤の原点とも思える場所にむかう旅となる。勉強会のあとは懇親会が行われ、和やかな宴となった。

今井真理 記
写真・田村百合子